第12章　石手川水系に於ける旧石器文化

重松　佳久

1．はじめに

石手川水系に於ける旧石器文化の研究は、現在皆無に等しく流域としての全体把握すら意味を持たない状況にあるかもしれない。

しかしながら、石手川水系は、幾枚かの洪積世河岸段丘をもち松山平野を貫流する主河川流域であることからも、文化層の存在は、全く否定されうるべきものではなく洪積台地端部、埋没段丘等に残る旧石器文化の痕跡の確認作業をあらゆる手段を用い進めて行くことに問題解決の方向性が内在されるものと考える。

瀬戸内の旧石器文化研究は、喜田貞吉によって国府遺跡の砂礫層下から検出されるとした大型粗石器論争によって始まり、岩宿遺跡発見以後の日本列島各地での旧石器時代遺跡の発見とあいまって、全国的風潮の中での鎌木・高橋両氏による石器群の編年的確立がなされた。〔鎌木・高橋 1965〕しかしながら、以後の調査面積の拡大とともに遺跡群の構造的理解の段階に至っては、内在される矛盾が松藤氏らの二上山山麓遺跡群の精力的は調査によって示唆されるに至り、量的保証を持つ原産地遺跡と周辺遺跡群の理解等をはじめ遺跡相互の構造的研究へと展開されつつある。

このような瀬戸内の旧石器文化研究の動向の中で、当地の旧石器文化研究は散発的資料紹介の域にあり、当時の社会的背景を考える上でも遺跡分布を流域として再考すべき状況にあるといっても過言ではない。あえて絶対的費料の希薄さの中で、平井氏の論功をかりて考察を加えてみたい。

2．石手川水系に於ける旧石器時代遺跡分布

現在、確認されている旧石器時代遺跡は、山地域から沖積低地に至る流域の高位・中位・低位の河岸段丘沿いに検出されている(表67)。こうした遺物群の検出例は、後世の遺構・遺物群中にわずかに混在するといった認識で処理されている状況にあり、遺跡群としての問題意識には至っていない。しかしながら、現在詳細に資料整備を行うに至っていない状況ではあるが、石手川水系左岸の小野川との接点において旧石器時代遺跡群の安定した集中をみることができる。

このように集中する遺跡の成立過程を復元すると形式的時間差を持つと考えられる遺物も含まれてはいるが、これらの集中は、単に検出例のみに起因するものではなくこの地域が、安定的な遺跡立地の環境にあったものと推定される。このような松山平野に於ける旧石器時代遺跡群の集中を仮に水系を軸とした人間集団の行動の起点的立地としてとらえ、同水系上流域に位置する山間部の惣部遺跡に見られる遺跡立地を季節移動に伴う移動的拠点もしくは、

捕獲遺跡として位置づけることも可能と考えられる。

また、同一遺跡において形式的・時間的差異をもつ遺物群の検出は、当遺跡の立地環境が時間を越えて、当時の水系、低地を背景とした人間行動の何等かの拠点として活用されたものと考える。

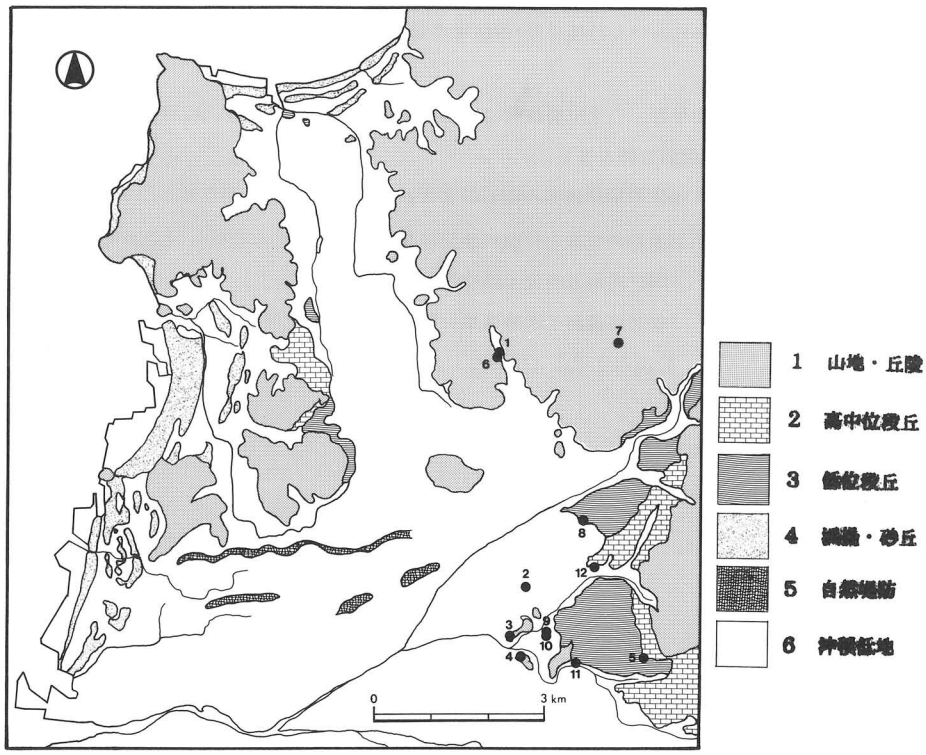
あえて詳細な遺跡・遺物群の検討の中で、処理されるべき内容を立地論のみで、提起することに、大きな問題を内在することになりつつも、こうした集団の把握と空間的生活間の設定は、遺跡立地環境に因るところが大きく先駆的には、稲田〔稲田孝司1990〕、大泰司（大泰司紀之1990〕の旧石器文化研究者らによって取り組まれ石材原産地と消費地関係等、集団の規模、定着度、分散移動の頻度、季節性などさまざまな問題提起がなされており、今後、早急に当地域における旧石器文化研究の視点として詳細な資料の蓄積と資料整備を踏まえ取り組まなければならない問題と考える。

3．まとめ

前述したように当地域の旧石器文化の把握は、現在の考古資料では、その社会を復元する事は困難な状況にあり、その方向性として考古学的資料群の実証が、量的な保証を得ていない現在、当地域に於ける地質・地理を踏まえた第四紀研究に大きな成果を見いだす事ができる。

現在、わが国の主要な沖積扇状地の形成時期は、沖積世（完新世）ではなく最終氷河期の最盛期または、それに至る低温期であったことが明らかになりつつあり〔井関弘太郎1988〕、また第四紀末期における日本の扇状地礫層の堆積期をおおまかに堆積頻度により概観すると約20,000年前、約9,000年前、約3,000年前の3期（斉藤1988）に大きく分かれることが指摘されている。こうした第四紀末期の沖積平野・沖積層の形成期における自然環境の把握は、当地域の遺跡環境を類推するうえで欠くことのできない研究作業であり、まさに平井氏の「松山平野、 石手川扇状地の地形と沖積層・追記」〔平井幸弘1990〕は、当地域における旧石器時代の自然環境のあり方を示唆する作業そのものと考えられる。さらに氏の広域テフラに対する視点は、安定した層位を持たないと考えられていた当地域の旧石器文化研究に、層位学的・形式学的同時性 の比較検討の可能性を導き出しているものと考えられ、今後、扇状地地形における基本層序、樽味遺跡、樽味四反地遺跡、桑原西稲葉遺跡、枝松遺跡3次調査地、釜ノ口遺跡7次調査地〔高尾・真木1990〕に見られるＡＴ火山灰検出等の多角的なデーターの蓄積が期待されるものである。

また、本稿の執筆にあたり小笠原善治氏（松山市立埋蔵文化財センター）の御協力を頂き記して感謝の意としたい。



第136図　石手川扇状地及び周辺の地形分類図と遺跡立地
〔海津(1982)を一部改変〕

●表67　石手川水系旧石器時代遺跡一覧

No.	遺　跡　名	所　在　地	標　高	出　土　遺　物
1	丸山遺跡	松山市祝谷町六丁目	90～120m	？細石核、細石刃、掻器、台形様石器、剥片・剥片屑
2	釜ノ口遺跡	松山市小坂四丁目	28m	ナイフ形石器、有舌尖頭器
3	天山天王ヶ森	松山市天山町	30m	ナイフ形石器
4	東山鳶ケ森	松山市東石井町東山	43m	ナイフ形石器（国府形）
5	五郎兵衛遺跡	松山市平井町	73m	ナイフ形石器、他
6	祝谷六丁場遺跡	松山市祝谷六丁目	60m	石核、他
7	伊台惣部遺跡	松山市下伊台町	140m	ナイフ形石器
8	樽味四反地遺跡	松山市樽味四丁目	39.5m	ＡＴ火山灰
9	筋違Ｆ遺跡	松山市福音寺	30m	ナイフ形石器（国府形）
10	筋違Ｈ遺跡	松山市福音寺	30m	ナイフ形石器(縦長剥片素材によるナイフ形石器)
11	久米高畑遺跡5次	松山市南久米町・来住町	35m	細石器
12	経石山古墳	松山市桑原四丁目	40m	細石器

（参考文献）

井関弘太郎他　1988　「日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究」

平井　幸弘　1990　「松山平野，石手川扇状地の地形と沖積層」『文京遺跡８，９，11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告書２

稲田　孝司　1990　「日本海南西沿岸地域の旧石器文化」『第四紀研究29巻第３号』

大泰司紀之　1990　「旧石器遺跡の位置と狩獣の季節移動ルートに関する考察」『第四紀研究29巻第３号』

鎌木義昌・高橋　護　1965　「瀬戸内地方の先土器時代」『日本の考古学　１』

高尾和長・真木　潔　1991　「釜ノ口遺跡７次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター